

台湾大学：「台湾における日本学、日本における中国学」

和田 英信

共同ゼミ「台湾における日本学、日本における中国学」は、旧暦の正月休み明けの二月下旬、お茶の水女子大学の姉妹校である台湾大学日語文学系において、教員・発表者のほか、日本文学を専攻する台湾大学の大学院生約二十名が参加して開催された。

教員による講演のほか、お茶の水女子大学の大学院生四名、台湾大学の大学院生三名が、それぞれの研究テーマに基づいて発表を行った。要旨は以下の通り。

大戸温子「日本の漢詩、和歌における閨怨詩の受容——紅涙を中心に」は、和歌を漢詩に翻訳した作品を取り上げる。日本人による漢語表現の非正規的用法、いわゆる「和習」に着目する大戸の問題意識は、ことばや詩意にとどまらない日中間の文化の枠組みの相違を照射する。

鄭舜瓏「『巡査の居る風景』について」は、中島敦の作品に関する分析。植民地朝鮮において日本の権力機構の末端に身を置く主人公のアイデンティティをめぐる煩悶をとりあげる。

黄韻如「日本の染織意匠と中国——波兔文様を中心に」は、江戸期の日本において流行した波兔文様に関する考察。兔の文様に関する日中双方の歴史的変遷を通観したうえで、これまで中国伝来の波兔文様とされてきた名物裂について疑問を呈する。

劉宛琦「太宰の天才観——中期作品から見られる天才像を中心に」は、翻案小説である「清貧譚」、二人の作家の書簡の交換を描く「風の便り」、ある女性の破滅を描く「水仙」という三つの作品の分析を通し、太宰の天才観をうかがおうとする。

三瓶はるみ「日中の酒にまつわる論争について——『酒飯論』を中心に」は、茶と酒、下戸と上戸の論争を主題とする日中の作品を比較し、影響関係や文化的背景の相違に言及する。

顔詩育「浦島伝説における亀と女性を結ぶことについて」は、日中の亀、あるいは亀と女性のイメージの変遷について考察したうえで、浦島伝説に現れる仙女のイメージの源泉を考察する。

梅尾亮子「伝統音楽の継承をめぐる——古琴を例に」は、古琴の演奏家呉文光の伝統琴曲の演奏実践を分析・紹介したうえで、伝統音楽の現代化は如何にあるべきかについて自己の見解を述べる。

発表はいずれも日本語で行われた。また日本側の発表者は、基本的に日中の文化比較の視点を取り入れることを課題とした。多方面にわたる内容、絵画・図版・音源等を用いた多彩なプレゼンテーションは、日本学、中国学における様々なアプローチの可能性を感じさせるものとなった。

今回のゼミ開催にご協力いただいた、台湾大学日語文学系主任趙順文先生、ならびに陳明姿先生に心からお礼申し上げます。